

支部例会会長からのお礼のご挨拶

2023年5月27日(土)に第87回日本生化学会中部支部例会・シンポジウムを開催致しました。

COVID-19も収束・終息しつつあり、会場にて開催する学術集会も増えてきましたが、愛知医科大学はアクセスの面で良好とはいえないこと、昨今のネット技術の進歩により会場開催を模倣した会議が可能となってきたこと、当初より会場開催は難しいと考えており期日が迫りつつある中で新たに会場を手配することができなかったこと等の理由でオンライン開催としました。参加者は教員58名、ポスドク・研究員8名、大学院生73名、大学生42名、その他4名の計185名でした。

今回は口頭発表数を極力増やして質疑応答の時間も確保する方針としました。発表と一口に言ってもすでに実験結果を蓄積してほぼ纏まった研究と、まだまだ途上の研究があるかと思えます。そこで今回は口頭発表をA、Bに分けることにしました。その結果、A演題10題、B演題23題の合計33題の口頭発表を行うこととなりました。ポスター発表は28演題でした。ネット上であたかも学会会場にいるようなバーチャルな感覚でポスターを閲覧し質疑応答することができたと思っております。

今回のシンポジウム「病態基盤と生化学」では、真下知士先生(東京大学医科学研究所)、中村昭範先生(国立長寿医療研究センター)にご講演頂きました。真下先生には「ゲノム編集研究の現状と課題」の題名で、先生の研究室が開発された日本初のゲノム編集技術としてCRISPR-Cas3をご紹介いただき、将来の展望に関してご説明頂きました。ゲノム編集分野での大きな発展の現状を学ぶことができたと思っております。中村先生には「アルツハイマー病の早期診断に役立つバイオマーカー」の題名で、同疾患研究の最先端の研究成果をご説明頂きました。時間の都合上講演時間が短くなってしまい、もう少し長い時間お聴きしたかったとお思いの方もいらしたと思います。この点は今回の大きな反省点です。

支部奨励賞に関しては審査員による選考の結果、以下の12名の方々が受賞されました(敬称略)。A-3 畑中 理菜(名古屋大学)、A-7 阿喰 萌香(名古屋大学)、A-10 岩田 悟(中部大学)、B-3 伊藤 彩夏(岐阜大学)、B-7 徳永 柊(名古屋市立大学)、B-11 中垣 春奈(名古屋市立大学)、B-16 藤原 奈生(岐阜大学)、B-17 深谷 陽子(名古屋工業大学)、P-15 加藤友真(三重大学)、P-20 川瀬宗之(名古屋市立大学)、P-22 若林佳輝(静岡県立大学)、P-25 田中京子(岐阜薬科大学)

審査を通じて印象に残ったのは票が殆ど割れなかったことです。良い研究発表は専門分野が多少異なっても審査員の皆さんが高く評価することを実感した次第です。

例会に引き続き総会をオンラインにて行いました。次期支部例会会長候補として五十里彰先生(岐阜薬科大学・薬学部)を推薦し、承認されました。次いで支部より令和4年度決算と令和5年度予算の会計報告、事業報告、次期支部幹事投票結果報告、次期支部役員の紹介、令和4年度中部支部支部長賞受賞者の発表があり、最後に第88回中部支部例会・シンポジウムの開催概要に関して五十里彰先生よりご案内を頂きました。

今回の例会・シンポジウムではこれまでにない実験的な試みをいくつか行いました。皆様にはご迷惑をおかけしましたし反省点も少なくないのですが、主催者としては学ぶものがいくつもあったと感じております。無事成功裡に終えることができましたのも、ひとえに関係者の皆様のご協力のおかげです。心より感謝申し上げます。末筆になりましたが、皆様の益々のご活躍、ご健勝を心よりお祈り申し上げます。

第87回日本生化学会中部支部例会会長
愛知医科大学分子医科学研究所
渡辺秀人